

『現代語訳 美味求真』 推薦コメント

食べるということは、対象化ではなくして、相手と同一になるということである。「美味」という形で存在の特権的現出を語る存在の哲学が、明快な現代語訳によってここに蘇った。奇跡のような感さえある。

クサカベクレス (哲学者)

「悪食が世界を救い未来をつくる」
悪食は粗食ではなく「舌の教育・経験」の問題である。ならば、舌を教育し、奇味や珍味を美味としようではないか。すでに世界中で20億人以上が2000種以上の昆虫を食べている。昆虫食こそSDGsの後釜SWGs（「持続可能なウェルビーイング」）実現の鍵なのだ。「悪食篇」で昆虫食のグルメ道を究めよう。

長沼毅 (生物学者)

人は一人では生きていけず、名著もまた一人では生まれ得ない。『現代語訳 美味求真』は言わば、食の傑物と飽くなき翻訳家と堅忍不拔の編集者による合作である。一人欠けても成立しなかった。食の見識を高めるべくページをめくり始めたはずが、最後のページを閉じるころには、世界の理を知ったことに気付く。三者の図らぬ企みにはまる、この愉悦――。

虎石晃 (文筆家)

『現代語訳 美味求真』は、読みやすい現代語でありながら、料理を作ることを愛し、食に深い関心を寄せていた河田さんの血が通っています。現代の食が「情報」として消費されがちの中で、本書は私たちに、自らの感覚の拠りどころをどこに置くのかを、厳しく、そして温かく問いかけます。100年前の「知」とつながり、明日の「生」をどう彩るかを指し示してくれる一冊です。「美味とは、贅を尽くすことではなく、自然の一部としての人間を再確認する儀式である」。食に携わるすべての者にとって、本書は羅針盤となるはずです。

梅原陣之輔 (八雲茶寮総料理長)